

針刺し事故防止機構付インスリン注射針の有用性について

渡邊 裕堯¹⁾, 笠井乃梨子¹⁾, 清水彩洋子¹⁾, 藤田 洋平¹⁾, 藤木 典隆¹⁾
 畑崎 聖弘¹⁾, 後藤 博美²⁾, 落合 直子²⁾, 宇山 美妃²⁾, 馬屋原 豊¹⁾
 大阪府立急性期・総合医療センター糖尿病内分泌内科¹⁾, 看護部²⁾

Key words▶

インスリン
 針刺し事故
 針刺し事故防止機構付ペン型注入器
 用注射針

要旨

当センターでは常時100名近くの糖尿病患者が入院しており、その多くがインスリンを使用している。急性期の病態では看護師がインスリン注射を行うが、ペン型注入器ではインスリン注射後にリキャップをして針を回収する必要があるため、針刺し事故が多発していた。そこで針刺し事故防止機構付きペン型注入器用注射針「BDオートシールド™」(BD-AS)を導入したところ事故発生数は著減した。一方でBD-ASは針先がみえないことによるインスリン注入不全に起因すると考えられる高血糖が散見された。そこでシールド部分が透明で注入時に針先が確認できる新世代BD-ASを導入したところ、安全かつ確実なインスリン投与が可能となった。

○緒言○

医療現場では、注射針を使用した手技を避けることができず、針刺し事故を経験した医療従事者も少なくない^{1)~3)}。ペン型注入器を用いたインスリン皮下注射時には、注射後にリキャップをして針を回収する必要があるため、針先と接触する可能性が高く、インスリン関連の針刺し事故も少なからず報告されている⁴⁾。当センターでは他科入院中の患者を含め、年間1,500人以上の糖尿病患者が入院している。周術期や集中治療中の患者においては患者によるインスリン自己注射が困難であり、医療従事者がインスリン注射を行う。糖尿病以外の疾患を主病態として入院する

糖尿病患者は、糖尿病内科病棟には入院せず、他科の病棟に入院となる。当院では糖尿病認定看護師が中心となり、新人教育や専門看護セミナーなど、各病棟で毎年最低1回ずつはインスリン注射手順について指導をしている。しかし糖尿病専門病棟の看護師と比較すると、インスリン注射に不慣れた看護師がインスリン注射を行う場面も少なくない。これらは、総合病院であれば同様に直面する課題かと推測される。このような継続的な指導体制を敷いているにも拘わらず、当センターでもインスリン針に伴う針刺し事故が報告されており、対策が必要であった。

一方で、多方面の医療行為において、針刺し事故防止機構付の医療機器の導

入により針刺し事故が減少すること⁵⁾が報告されており、針刺し事故防止機構付の針の使用が国から推奨されている海外諸国も散見される。インスリン手技においても同様に、針刺し事故防止機構付の機器の使用により、針刺し事故を予防できることが報告されている⁶⁾。

当センターでは2013年10月より、インスリン針として、日本BD社の針刺し事故防止機構付きペン型注入器用注射針「BDオートシールド™」(BD-AS)を導入した。これまで、BD-ASについてのアンケート評価の報告は認め⁷⁾が、効果についての文献的報告は認めない。そのためわれわれは当センターにおけるBD-AS導入前後におけ